

一般社団法人 関西常磐津協会 機関誌

第44号

〒542-0072 大阪市中央区高津 2-8-10 末広ビル 502号室
Tel(06)6214-0753 Fax(06)6214-0755

つどい



第七六回常磐津節公演会より（5面参照）

御挨拶

一般社団法人 関西常磐津協会

理事長 常磐津都七郎蔵



明けましてお目出度うございます。
佳き申年の新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。
常磐津節には人と人とのつながりの中で相手を思いやるという、江戸時代からの重要なメッセージが込められています。
そのことに想いをはせながら日々を過ごしておりますと、今年こそはテロや紛争の無い世界になってほしいと願うばかりです。
さて、当協会は昭和十六年に任意団体として発足し、今年七十五年目に当たります。その節目として、十一月二十七日（日）国立文楽劇場に於きまして演奏会を開催致します。この演奏会は定期の公演会のように正会員のみ参加の演奏会ではなく、準会員、

賛助会員も出演できる記念演奏会を考えております。
そして一昨年、昨年と公演会で演奏致しました「三世相錦練文章」の大詰「夢醒め・三社祭の段」を演奏し、三年懸かりでの全六段の大団円とさせていただきます。
今日まで協会を続けて来られましたのも、先人諸師のご尽力と協会を支えて下さいました協会皆様のお蔭と、紙面をお借りして感謝申し上げます。此れからも協会事業を精力的に運営し、常磐津節の普及、後継者の育成に努めて参りたいと思っております。
何卒今後とも、関西常磐津協会をよろしく願いますと共に、皆様の益々のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、新年の御挨拶とさせていただきます。

江戸浄瑠璃「常磐津節」に触れてみませんか・・・

- 内容 浄瑠璃と三味線の講座
- 時間帯 要相談(月2~3回)
- 場所 当協会事務所(国立文楽劇場東隣)
- 受講料 無料
- 期間 平成29年3月まで

お申し込み・お問い合わせは担当理事 常磐津綱男まで
TEL:090-8200-6191 FAX:06-6214-0755
Eメール:tuna-03@world.ocn.ne.jp

手ぶらで
お越しください
ときわづカルチャー
一期生募集



「冥土通い」の痕跡を訪ねて
—常磐津「墮地獄の段」にちなんで—

当協会では、年に一度の常磐津節公演会で、平成二六年より『三世相錦織文章』を全三回のシリーズで演奏しています。その中から、冥途のシーンを写実的に、ときにコミカルに描いた『墮地獄の段』にちなみ、作品の背景を考察してみたいと思います。

常磐津「墮地獄の段」の面白さは、私たちに往くことのできない「あの世」へ、実際に行ったり見たりしたかのように、物語が巧みに仕組まれていることにあります。のちに述べる小野篁のように、もし、そんなことができるとしたら、あの世に先立たれた多くの諸先輩方とコンタクトを取って、冥土の体験談を直接伺いできるのですが、それは叶いません。というところで、私たちの近所で、冥土めぐりを仮想体験できる、「六道珍皇寺」（京都市東山区六条）を訪れました。

珍皇寺は、芝居等でも有名な「鳥辺山」の入口にあたります。鳥辺山は、亡骸を墓地へ葬る時に必ず通るために、冥土への入口とも考えられています。珍皇寺のご本尊は、薬師如来坐像（平安時代、重要文化財）で、現在これは収蔵庫（薬師堂）に保管され、本堂には薬師三尊像が安置されています。珍皇寺で最も有名なのは「六道参り」で、「お精霊さん迎え」ともいわ

れます。毎年八月一三〜一六日の盂蘭盆には、各家で先祖を祀る報恩供養をしますが、京都ではそれに先立つ八月七〜一〇日の間に、精霊を迎えるため、珍皇寺を参詣する風習があるのです。先祖の霊を呼び戻す「迎え鐘」を撞き、境内の西側に多くの石地蔵の並ぶ「賽の河原」と呼ばれる所で水回向をします。

今回のお目当ては、迎え鐘のお堂と並び建つ「閻魔堂」、別名「篁堂」です。閻魔堂の中央には閻魔大王座像が置かれ、その右に小野篁卿立像、左に弘法大師座像が安置されています。どういう経緯によるのか、この閻魔大王像は、小野篁作と伝えられます。常磐津「墮地獄の段」とは近からず遠からずになります。閻魔大王と小野篁卿にまつわる伝説をご紹介します。

〈閻魔大王〉

古代インドのサンスクリット語では、ヤマ・ラージャ。経典では人間の祖とされ、最初の死者となったため、死者の国の王と考えられるようになりました。虚空遙か奥に住み、生前に善い行いをした者を天界ヤマの国へ迎え



るとされました。これが中国に伝わって閻魔羅闍と訳され、ラージャは王を意味するので閻魔王（閻魔大王）と訳されました。

日本の仏教では、閻魔王を地蔵菩薩の化身とも考えるようになりました。衆生（あらゆる生物）を六道輪廻、つまり、六道の間を生れかわり死にかわりして、迷いの生をつづけることから救うと共に、死者の生前の罪を裁く神、冥界の主、王と位置づけられるようになりました。

〈小野篁卿〉（八〇二年〜八五二年）

嵯峨天皇に仕えた平安初期の公卿で、小野道風、小野小町の祖父でもあります。文武両道に優れ、小倉百人一首など歌人詩人としても才能を発揮。歌舞伎や様々な物語等にも登場しています。若くして閣僚級の「参議」という高位に至ったのですが、奔放不羈な性格と奇行によって「野狂」とあだ名されました。遣唐使副使にも任ぜられました。大使の藤原常嗣と争い、嵯峨上皇により隠岐に配流されるなど、多難な人生を歩みました。一説に、珍皇寺を建立したのも小野篁であったといわれています。

小野篁には、冥土とこの世を往き来する「冥土通い」の伝説があります。つまり、昼間は、この世の朝廷で参事を勤め、夜間は冥土の閻魔庁へ出勤するダブルワークをこなしていたのです。閻魔庁での役目は「冥官（めいかん、みょうかん）」。「常磐津「墮地獄の段」



にも出てくる役名です。冥官とは、今でいう裁判官で、裁判長である閻魔大王の脇を固めていました。この冥土通いの伝説は、『今昔物語』等に記され、平安時代後期には知られていたようです。

ところで、篁卿は、どのようにして冥土へ通っていたのでしょうか。その答えは珍皇寺の庭にあります。その名も「冥土通いの井戸」。篁卿は、大内裏南東角の自宅から朝廷へ出勤し、夜は珍皇寺の冥土通いの井戸を通って閻魔庁へ出仕したのです。翌朝は、別の井戸「黄泉がえりの井戸」から戻りました。黄泉がえりの井戸は、化野福生寺（廃寺）、千本閻魔堂、珍皇寺（平成二三年に遺構が発見され復元されています）の三カ所が知られます。

奇行で知られた篁卿ですが、決して幽霊や妖怪ではありません。どうして、冥土通いのような伝説が生まれたのでしょうか。一つには、たいへんな母思いの人だったことが関係しているのではないかと想像してみました。篁卿は、母の死を長い間悲しんでいたと伝えられます。そこで、冥土への接点と考えられ

ていた鳥辺山にほど近い珍皇寺に、篁自身が冥土へ行ける井戸を掘ったのではないのでしょうか。

もう一つは、篁の才能と手腕が関係しているのではないのでしょうか。篁卿にとつて、隠岐への流刑、いわゆる鳥流しは「死罪」にも近いものでしたが、わずか二年で帰京し、翌年朝廷に復帰しました。天皇が彼の才能を惜しんで呼び戻したのですが、世間ではこの復帰劇を「蘇り」黄泉がえり」と謳ったのではないのでしょうか。

閻魔庁の冥官としての逸話には、次のようなものがあります。

西三条大臣の藤原良相が病死しました。良相が閻魔大王の前へ引き立てられると、大王の横には篁の姿が……。篁冥官は大王に「このかたはたいへん正直で良い人物です、許してあげてください」と進言します。良相は、どうして篁がここに居るのか、と驚きますが、はっと目を開けると、生き返っていました。のちに宮中で、良相が恐る恐る篁にお礼を言うと、篁は「あなたは以前、私のことを護ってくれましたから、その恩返しをしたまです。このことは誰にも話さないように」。良相はますます篁に一目を置くようになって、このように伝えられています。

それでは、このような伝説を生み出した六道珍皇寺とその周辺について、取材当日の様子を書き留めながら、ご紹介したいと思います。

祇園四条または清水五条から徒歩約

十分、大和大路から松原通りを東へ。故常磐津文字一朗師宅のあった路地を過ぎると、「愛宕念仏寺跡」の碑、鳥辺山の入口です。昔、鳥部氏が住んでいたため、そう呼ばれるようになってきました。

坂道は徐々に傾斜を増し、昔は山道であったと想像すると、その険しさを感じます。ほどなく「六道之辻」の碑があり、すぐ右には名刹の六波羅蜜寺、左には昔話で有名な幽霊子育館のお店。さらに古い町並みを進んでいくと「小野篁卿舊跡」の碑、いよいよ珍皇寺の入口です。



珍皇寺は八月の精霊参り以外の日は参詣者は多くないようで、取材当日はシルバーウィーク初日で特別拝観も開催される行楽日和でしたが、境内は人混みもなく静寂でした。

「大椿山六道珍皇寺」。平安前期の延暦年間、弘法大師の師である慶俊僧都が開基とされますが諸説あり、空海説、小野篁説、また鳥部氏が建立した宝皇寺、別名鳥部寺説もありますが、遺址もなく明らかではありません。さらには、承和三年（八三六年）、この地の豪族山代淡海等が国家鎮護の道場として建立したという説もあります。もと

は真言宗で平安・鎌倉期には東寺を本寺とする大きな規模の寺でしたが、中世の兵乱で荒廃し、のち南北朝時代の貞治三年（一二六四年）建仁寺の住持聞溪良聰によって改宗再興されました。

山門をくぐると数十メートル先の正面に本堂が見え、右側手前から薬師堂（収蔵庫）、閻魔堂、迎え鐘の順に並びます。

まず、閻魔堂をお参りしました。少し屈んだ位置の小さな覗き窓から、衣冠束帯姿の小野篁卿立像、大口を開けた強面の閻魔大王座像を拝みます。覗き見による程よい距離感が、大王と対面する緊張を生み出すのか、大王に一喝入れられているように思われました。

その隣には寺宝の迎え鐘。開基慶俊僧都が造られた物です。この鐘には次のような不思議な逸話があります。

僧都は、この鐘を三年間、地中に埋めておくように寺僧に命じて唐へ旅立ちます。しかし、寺僧は待ちきれず一年半で掘り出し、鐘を撞いてしましました。鐘の音は遙か唐に居る僧都の耳にまで届き、僧都は残念がります。「三年間埋めておけば、その後は人手を要せず六時になると自然に鳴るようになったのに、惜しいことをしてくれました」。このように、唐にまで響く鐘ならば、冥土にまで届くと信じられ、迎え鐘になったと伝えられています。この鐘はいつでも撞いてよいのですが、やはりお盆にとつておこうと遠慮して、



←先祖の霊を呼び戻すという迎え鐘を撞く参詣者

本堂の正面手前には「三界萬霊供養塔」、左には室町時代よりあるという多くの石地藏（賽の河原）。お盆の参詣には参道で高野槇を買い、本堂で水塔婆に戒名を書いてもらい、石地藏前で水むけ（水回向）をします。

いよいよ、靴を脱いで、普段は非公開（秋の特別拝観）の本堂に入ります。薬師三尊像に参拝し、右の座敷へ進みます。壁面には、六道参りの際に飾られる様々な掛け軸がみえます。閻魔大王図には常磐津「墮地獄の段」に登場する五官王・冥官などもしつかり描かれています。地獄極楽図、四聖大帝（北帝・水神に従う四神）図、三官大帝（天・地・水の三界を司る神）図、熊野観心十界図等も掛けられ、いずれも畏怖を感じさせる内容に満ちています。珍皇寺に御縁のある人物の掛け軸も二〜三点みえます。

縁側へ出て、すぐ右手の「水琴窟」にしばし聞き入ります。お手洗い付近なので、立て札がなければ、手水鉢と誤解されるかもしれませんが、庭には大きな池はありませんが、清水の流れる

小川と、綺麗に手入れされた木々が目を引きます。
渡り廊下を抜けて大広間へ。最近奉納された閻魔大王胸像や地獄絵図の屏風等が飾られています。この屏風は色もデザインもカラフルな現代風で、時代の変化を感じさせますが、やはり「地獄」は珍皇寺の名物であることを実感しました。

そして庭へ。この日は素晴らしい晴天。午前中とあって風も澄んで心地よく、少し陽に当たっていると汗ばむ位の穏やかさでした。縁側を下りると、すぐ前で水占いができます。寸志を納めてお神籤を一枚取り、小川の流れに浸すと、文字が浮かび上がってくるようです。そのすぐ左手に、白い御幣の



かかった井戸があります。これこそが篁卿ゆかりの「冥土通いの井戸」です。四角い石垣で組まれ、現在も水が湧いています。あたりに草が茂り、路地の井戸のような生活感にまったくありません。冥土へ続くかのような畏怖が確かに感じられます。隣には、篁卿が地神を祀ったという竹林大明神の御社もあります。

さらに奥の方に、井戸がもう一つみえます。平成二三年に隣接の民有地で遺構が発見された「黄泉がえりの井戸」で、新たに石畳を敷いて整備されています。こちらも四角い石垣で組まれ、御社が並びます。御社は「小野愛宕権現」です。愛宕といえ、京都では防火の神様と知られる愛宕山の愛宕神社（京都市右京区）がその総本社として知られます。一方で、地藏菩薩が垂迹され姿を現されたのが愛宕山であったとも伝えられ、現世・来世を救済する地藏菩薩は閻魔大王の本身であるとも考えられたため、この篁卿ゆかりの井戸の発見を機に、平成二五年、六道輪廻の化身として愛宕権現が祀られることになったそうです。

今回の探訪では、残念ながら、小野篁卿が亡き母への想いを託したであろう痕跡やエピソードを見つけることはできませんでした。しかし、篁卿や閻魔大王にまつわる様々な伝説や逸話を、歩きながら肌で感じられたことは何よりの収穫でした。
振り返りますと、人々はいつの時代

でも、三世（現世・過去・未来）と自分の身の置き所に関心を寄せ、現世から来世へと幸福が続くことをひたすら願ってきたのだと思われます。人々のそうした強い思いが、篁卿や閻魔大王のような人物像を練り上げてきたのではないのでしょうか。

先人を深く敬い、先人から多くのことを学び、それを後世に伝えていくこと。これは、伝統芸能に携わる私たちにとつて、最も大切な姿勢であり、目的とすべきことです。つまり私たちは、常磐津節という古典芸能を通じて、まさに三世をクロスオーバーしているのです。冥土通いの伝説は、伝統芸能や私たち芸能者のあり方と、根底でつながっているといえましょう。

皆さまは、もし冥土通いができるとしたら、どのような思いを抱えてお出かけになり、どのようなお土産を携えてお戻りになるでしょうか？
(都代太夫、若音太夫)

〈寄稿〉
鑑賞記 常磐津に見る冥土
鶴見佳子(文筆家)

平成二七年(二〇一五)一〇月三日、大阪・日本橋の国立文楽劇場で、常磐津の「三世相錦繡文章」を鑑賞した。
「三世相錦繡文章」とは、安政二年(一八五五)五月、常磐津家元のおさらい

会で素浄瑠璃として初演された全六段の大曲だ。通称、「三世相」。三世桜田治助作詞、四世岸沢古式部・六世岸沢式佐作曲。その二年後の七月には江戸中村座で歌舞伎化された。全幕全場、常磐津の太夫・三味線が顔ぶれを変えて出演し、当時、大変な呼び物になったという。

近年は通して上演されることが少なくなり、関西常磐津協会の主催公演では五〇年ぶりだという。協会による前回の上演は昭和四〇年(一九六五)三月二三日(大阪)と同日二四日(京都)の公演。「人間国宝の一巴太夫さんが亡くなった今、その時のことを知っているのはもう私だけになりました」と、同協会理事長の常磐津都岐蔵さんがおっしゃっていた。

長編の通しものなので、平成二六年に「仲町福島屋の段 店先」から「仲町福島屋の段 縁切り」「仲町福島屋の段 長庵殺し」「道行蝶吹雪 州崎堤の段」まで、平成二七年は、「十萬徳土の段」から「墮地獄の段」「極楽浄土の段」までを上演。平成二八年に、残る「夢醒め三社祭礼の段」を上演して完結するという、三年がかりの息の長いプロジェクトなのだ。

一年前に聴いた部分はもうすっかり忘れたわ、という私のようなダメ観客のために、司会を務める桂九雀さんが「昨年の三時間半を三分で説明します」と、上手にストーリーを教えてくださいました。さすがが噺家だ。

この「三世相」、お園と六三郎の心

中事件を題材に、愛想づかし、心中道行、冥土風景、子別れなど、さまざまな趣向が繰り広げられる。いわば江戸版ジェットコースタードラマなのだ。今年、演奏する「十萬億土の段」「墮地獄の段」「極楽浄土の段」の舞台は“冥土”だ。これが極めておもしろい。これでもか、これでもか、と冥土の風景が描かれ、そこかしこにその当時のパロディが組み込まれている。

三途川や剣の山は、相撲甚句のような三味線で表現されるし（確かに、川や山がつくと力士の名前に思えてくる）、「逢いたかつた逢いたかつた逢いたかつた」との大夫の語りは、もしかしてAKBのパロディか、と思つたほどだ（私はクスリと笑つてしまったのだが、周りの人は真剣に聴いていたので、パロディではないかもしれない。；）。

幕間に、司会の九雀さんが「今日の公演部分は、落語の『地獄八景亡者戯』やないでしょうかね。地獄八景はここからとつたんでしょうかね」とコメントした。十萬億土、墮地獄はまさに「地獄八景」であり、極楽浄土は子別れだった（それも相当悲惨な）。しかし、来年にはハッピーエンドで終わるといふ。実は「お園の夢のなかだった」という構成らしい。夢オチというの、いろいろな文芸作品の“テッパン”の手法だと思うが、来年、「三世相」はどのようにハッピーエンドに向かつて昇華していくのだろうか。

私にとつて常磐津はこれまで、江戸

の文芸、江戸の粋や洒落というイメージが強かつたのだが、「三世相」は関西人として強くシンパシーを感じた作品だつたし、ちよつと常磐津のイメージが変わつた。

帰宅してから調べてみると、桂米朝は「地獄八景亡者戯」の原典を、天保一〇年（一八三九）亥歳刊行の安遊山人作「はなしの種」という上方出来の小咄本に見られる、としている（ちくま文庫「桂米朝コレクシヨン2」より）。その中に、「玉助めいどの抜道」という三世中村歌右衛門（加賀屋梅玉）が天保九年に死去したのをあてこんだ作品があり、小咄としてはかなり長い、これが「地獄八景」が文字で見られる一番古いもの、と指摘する。

米朝師の孫弟子の九雀さんの「ここから、落語の地獄八景をとつたんでしょうかね」ではなく、すでに「三世相」の初公演前に、「地獄八景」の片鱗はあつたのだ。

何が先か後かを言いたいのではない。常磐津であれ、落語であれ、冥土、つまり死ぬことを文芸作品にしたり茶化したりする「余裕のようなもの」「粋や洒落のようなもの」、それを楽しむ「胆力のようなもの」が江戸時代の日本人にしっかりと息づいていることに感心したのだ。

落語の「地獄八景亡者戯」は、一七〇年以上前に端を発し、後世に一時間を越える作品になるまで、多くの手が加えられ、時代時代の風景を織り込むことで、各時代の名作品であり続けた。

実は私自身も今、冥土をテーマにした創作落語に取り組んでいるところで、冥土に大きな興味を抱いているところで見たと常磐津だつたから、これだけハマつたのだろうかと思う。

一方で、現代の日本人には、江戸時代の人々がついてきた粋や洒落や胆力のようなものは希薄になつているのかもしれない。死ぬことは恐ろしいこと、老いることは厳しいこと・・と、生命保険にもサプリメントにも新聞記事にも煽られている。そんな現代人は、冥土行きをおおらかに描いた文芸作品から学ぶことが多いのかもしれない。

平成二八年一月二七日、関西常磐津協会は国立文楽劇場大劇場で設立七五年記念演奏会を開く。そして、「三世相」がグランドフィナーレを迎える。楽しみになつてきた。

◆ 協会だより ◆

あしあと（平成27年後期）

協会

◆ 芸団協関西「淀のたまりは華やかに」平成27年9月26日（土）14時開演
吹田・メイシアター中ホール



当協会のほか、長唄・日舞・演劇・バレエ等の実演家団体との合同公演。今回は、美佐季・亜香首・麒六の浄瑠璃、綱男・三都貴の三味線で、素浄瑠璃「夕月船頭」等を演奏しました。

◆ 第七六回常磐津節公演会
平成27年10月3日（土）14時開演
大阪・国立文楽劇場小ホール

女流は、三都由紀・三都姫ほかの「松の羽衣」、美佐季・三都貴ほかの「うつば猿」を、「三世相」通しの2年目として、都代太夫・小欣矢ほかの「十萬億土」、小由太夫・綱男ほかの「墮地獄」、一佐太夫・都岳蔵ほかの「極楽浄土」。

◆ときわづカルチャー

常磐津普及を目的に新たな体制ではじまった常磐津入門講座。第一期は平成27年4月から29年3月まで。文化庁の助成により受講料は無料。担当は綱男理事。

会 員

◆発会九四年都会

平成27年7月5日(日)
京都南禅寺前の料亭菊水で、都岳蔵・都史ご門弟による演奏会。東京から小文字太夫師にも助演いただきました。

◆第二三回

常磐津都岳蔵
研究会
平成27年11月1日(日)
東京・紀尾井小ホール

このたびも「仮名手本忠臣蔵」をテーマに開催。「六段目」「七段目」を、一佐太夫・菊美太夫・都代太夫・和英太夫・千寿太夫・一男太夫、文字満咲、都岳蔵、都史にて。



◆第九回常磐津綱男勉強会

平成27年11月29日(日) 13時半開演
名古屋・今池ガスホールで、舞踊三題のほか、素浄瑠璃「娘獅子」「蕎麦屋の三つ面」「助六」などを演奏しました。綱男・綱実・綱千華・遠藤肇ほか出演。

◆芸能古今東西 面白の芸能絵巻

平成27年11月8日(日) 15時開演
滋賀県立文化産業交流会館の特設舞台「長栄座」公演。前原和比古さんの演出で、東西の舞踊家とともに「そばやの三ツ面」「大和団子」「廓八景」、さらに「晒女」のさらし合方を長唄連中と掛合の三味線で演じ、近江の秋を彩りました。浄瑠璃は巴瑠幸太夫・巴松太夫・若音太夫、三味線は式松・小東矢・祐二郎。

◆常磐津節松山

演奏会
平成27年11月22日(日) 18時開演
松山・大手町ビル
NPO法人いよ和塾の主催。素浄瑠璃「狐火」「雷船頭」、舞踊「松島」。巴瑠幸太夫、小欣矢ほか出演。



◆はじめまして邦楽

平成27年12月12日(土) 14時開演
京都・大江能楽堂
京都市主催「和の文化体験の日」の企画。楽器や表現技法を実演つきで解説、「釣女」を観客全員で語るワークショップ、重森三果御連中と掛合による「都十二月」など。出演は都代太夫・若音太夫、都史。解説は竹内有一。

これから(平成28年1月)

協 会

◆常磐津塚法要
平成28年4月4日(月) 正午より
大阪・寂光寺(江口の君堂)

◆第四回定時社員総会
平成28年6月(予定)

◆関西常磐津協会七五周年演奏会
平成28年11月27日(日) 午後
大阪・国立文楽劇場
記念演奏会のため大ホールにて開催します。ぜひ、お誘い合わせの上、ご来場ください。申し込み、お申し込み申し上げます。「三世相」通し演奏の第三部として、「夢醒め」を経て男女全員出演による「三社祭」まで、いよいよクライマックスを迎えます。若柳壽延様・若柳吉蔵様の舞踊で華を添えていただく予定です。

会 員

◆常磐津節保存会
平成28年2月1日(月) 午後
京都・京都芸術センター
「常磐の老松」都代太夫、都史ほか
「地蔵の道行」一佐太夫、都岳蔵ほか

◆常磐津協会(東京)七〇周年演奏会
平成28年5月29日(日) 午後
東京・国立小劇場
「三世相」通しほか。

お祝い

叙 勲

平成27年春の叙勲において、常磐津一佐太夫理事が旭日双光章を受章されました。誠におめでとうございます。

結 婚

平成27年6月、常磐津都史さんが今井深希さんと結婚されました。おめでとうございます。これを機に奥様も常磐津の稽古に励んでおられます。

会 員 異 動

〈退会〉
正会員 文字 一三
準会員 巴 瑠 正(二巴太夫門弟)
賛助会員 西 川 鯉 矢(小欣矢門弟)

編 集 後 記

鶴見佳子さんからご寄稿を頂戴致しまして、有り難う御座いました。鶴見さんは色々な演奏会等へも出掛けられ、勿論、当協会の公演会へも度々お運び頂いて居ります。そう、重ねて御礼申し上げます。私は久しぶりに「三世相錦織文章」のコーナーを書かせて頂きました。楽しんで頂けましたでしょうか？皆様よりのお知らせやご寄稿を、どんどんお待ち致しております。次回も楽しんで頂けます様に頑張らせて頂きます。都代太夫